伊 勢 国 府 跡 9

２００７年3月

鈴鹿市考古博物館

例　言

１．本書は，国庫・県費補助事業として鈴鹿市が 2006(平成 18) 年度に実施した国指定史跡伊勢国府跡ほか発掘調査等事業のうち伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）第 21 次調査の概要をまとめたものである。

２．発掘調査は以下の体制で実施した。

調査主体	鈴鹿市　（市長　川岸光男）	
調査指導	八賀　晋（三重大学名誉教授）	
	川越俊一（奈良文化財研究所都城発掘調査部長）	
	内田和伸（奈良文化財研究所文化遺産部主任研究員）	
	伊藤久嗣（鈴鹿市文化財調査会委員）	
	金田章裕（京都大学大学院文学研究科教授）	
	渡辺　寛（皇學館大学文学部国史学科教授）	
	和田勝彦（東京純心女子大学事務局長）	
	文化庁文化財部記念物課	
	三重県教育委員会文化財保護室	
調査担当	鈴鹿市考古博物館	
組織及び構成	鈴鹿市考古博物館長	中森　成行
	主幹兼埋蔵文化財グループリーダー	藤原　秀樹
	埋蔵文化財グループ副主幹	浅野　隆司
	主　査	田中　忠明
	事務吏員	伊藤　　淳
	事務吏員	田部　剛士
	嘱　託	吉田真由美
	嘱　託	林　　和範
	嘱　託	吉田　朋史
	嘱　託	服部　英世
	嘱　託	加藤　拓也

３．調査を実施した場所及び面積は、鈴鹿市広瀬町字西野 3242 番地の 500 ㎡である。

４．調査期間は 2006 年 7 月 19 日から 2006 年 11 月 23 日までである。

５．現地調査は伊藤と田部が担当し，本書の編集・執筆は田部が担当した。

６．調査参加者は以下のとおりである。（敬称略・順不同）

〔現地調査〕小河清角・小河　茂・水野　豊・森　明・野口省三

〔屋内整理〕杉本恭子・永戸久美子・別府智子・加藤利恵・池田美和

７．Fig. 1 では国土地理院発行 1:50,000 地形図四日市・亀山の一部を使用した。

８．座標は過去の調査との整合性を保つため，国土座標第Ⅵ系を用いている。図中の方位は座標北を示す。

９．検出した遺構には，遺構番号の前に性格を示す記号を付与している。その性格は以下のとおりである。

ＳＤ･･･溝　　ＳＫ･･･土坑　　ＳＸ･･･性格不明の遺構

10．航空写真撮影については，鈴鹿市考古博物館伊藤・田部の監修のもと，株式会社アイシーが実施した。

11．本調査にかかる遺物・図面・写真は全て鈴鹿市考古博物館が保管している。

12．調査及び報告書刊行にあたっては上記指導委員の先生方の他に，地権者ならびに地元各位をはじめ，下記の方々のお世話になりました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）

禰宜田佳男・山田猛・鈴木克彦・筒井正明・吉水康夫・河北秀実・水橋公恵・新田　剛・小倉　整・江藤雅範・江藤盛一・広瀬町自治会・西冨田町自治会・中冨田町の山自治会・中冨田町の町自治会

本文目次

Ⅰ. 遺跡の位置と過去の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
Ⅱ. 調査の経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
Ⅲ. 調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
Ⅳ. 基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
Ⅴ. 検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
Ⅵ. 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
Ⅶ. まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

表目次

Tab. 1　長者屋敷遺跡調査履歴一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
Tab. 2　報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

図版目次

Fig. 1　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
Fig. 2　調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
Fig. 3　遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7・8
Fig. 4　土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
Fig. 5　出土遺物（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
Fig. 6　出土遺物（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
Fig. 7　過去の調査区配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

写真図版目次

Plate 1　調査区航空写真 / 調査前風景 / 北側調査区遺構検出状況 /SD267 検出状況 /SD267 土層断面・・・・ 14
Plate 2　SD277 土層断面 /SD277 遺物出土状況 /SX268 検出状況 /SX268 掘削状況 /SD281 遺物出土状況 /
SD281 土層断面 /SX274 検出状況 / 金藪内にある巨石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
Plate 3　土師器盤（Fig. 5-1）/ 平瓦（凸面）（Fig. 5-7）/ 打製石斧（Fig. 5-2）/ 平瓦（凸面）（Fig. 5-3）/ 平瓦
（凹面）（Fig.5-8）/ 丸瓦（凹面）（Fig.6-11）/ 丸瓦（玉縁部）（Fig.6-10）/ 刻印瓦・・・・・・・ 16

Ⅰ．遺跡の位置と過去の調査

長者屋敷遺跡は鈴鹿市広瀬町及び西冨田町，亀山市能褒野町・田村町にわたって広がる周知の遺跡であり，安楽川北岸の標高 50 m前後の段丘上に位置する（Fig. 1）。古くから瓦等の散布地として知られ，昭和 32 年には京都大学の藤岡謙二郎を中心とした学術調査がおこなわれている。その結果，礎石建物等が確認され，軍団を兼ねた初期国府跡と報告されている。

その後，平成 4 年から鈴鹿市教育委員会及び鈴鹿市考古博物館が学術調査を継続して行なっている（Tab. 1）。これらの調査を通じて，平成 7 年度までには伊勢国府の政庁跡の構造や規模の概略が判明した。それ以降は政庁周辺の調査を進め，政庁に西接して「西院」と呼ぶ区画が確認された。また，政庁の北側には瓦葺礎石建物が整然と立ち並ぶとともに，それらを区画する方格地割の存在等が確認されている。その後，この方格地割は 1 つの区画が一辺約 120 mのほぼ正方形で，区画の周囲に築地塀が巡らされていたことが指摘されているが（宇河 1996，1997），その範囲等詳しいことについては未だ確定できていない。

そこで，ここ数年鈴鹿市考古博物館では，この北方に広がる官衙と推定される範囲（以下，北方官衙とする）を確定する目的で調査を続けている。その結果，区画溝が確認され，方格地割は東西に 4 区画，南北に 3 区画はあることが明らかとなってきている。ただし，これらの区画溝が本当に北方官衙を区画する溝なのかは出土遺物が乏しいこと等から慎重な意見も指摘されている。しかしながら，平成 17 年度に行なった東限の確定を目的とした調査でも，推定された位置に区画溝が確認される等，国府跡の周りに計画的な方格地割が存在していたと考える材料が整ってきている。

Ⅱ．調査の経緯と経過

昨年度までの調査成果を基に，引き続き北方官衙の北限と区画の計画性を確認することを目的とし，東西溝と南北溝との交点と推定される地を発掘地として選定した（Fig.2）。また，調査地は長者伝説の由来となった，通称「金藪」に南接する場所であることから，大きな成果が期待された。なお，これまでの長者屋敷遺跡の区割りでは６ＡＣＢ－Ａ区となる（新田 1994）。

発掘調査は平成 18 年 7 月 19 日から着手し，11 月 23 日をもって終了した。約 4 ヶ月間の調査にて実働 30.5 日，作業員延べ 64.0 人を要した。以下，調査日誌を抄録することで調査の経過にかえる。

〈調査日誌〉

7 月 19 日　レベル及び座標移動。

7 月 22 日　テント設営。

7 月 27 日　トイレ設営。調査区草刈り。発掘用具購入。

7 月 31 日　重機搬入。東側より表土剥ぎを開始し，南及び西側調査区の表土剥ぎまで終了する。東側調査区で溝 4 条以上を確認するも，南側調査区では想定された南北溝の確認できなかった。西側調査区では，溝 1 条と大型の遺構を検出する。

8 月 1 日　北側調査区の表土剥ぎを継続。西壁から続く東西溝が途中で途切れることを確認する。また，西側調査区で検出した大型遺構の全形確認のため，調査区を拡張する。当館，中森成行館長来跡。「金藪」は古墳の可能性があるため，その周濠の有無を確認するための南北トレンチを北側調査区の中央に設けるように指示する。しかし，遺構は一切確認されなかった。

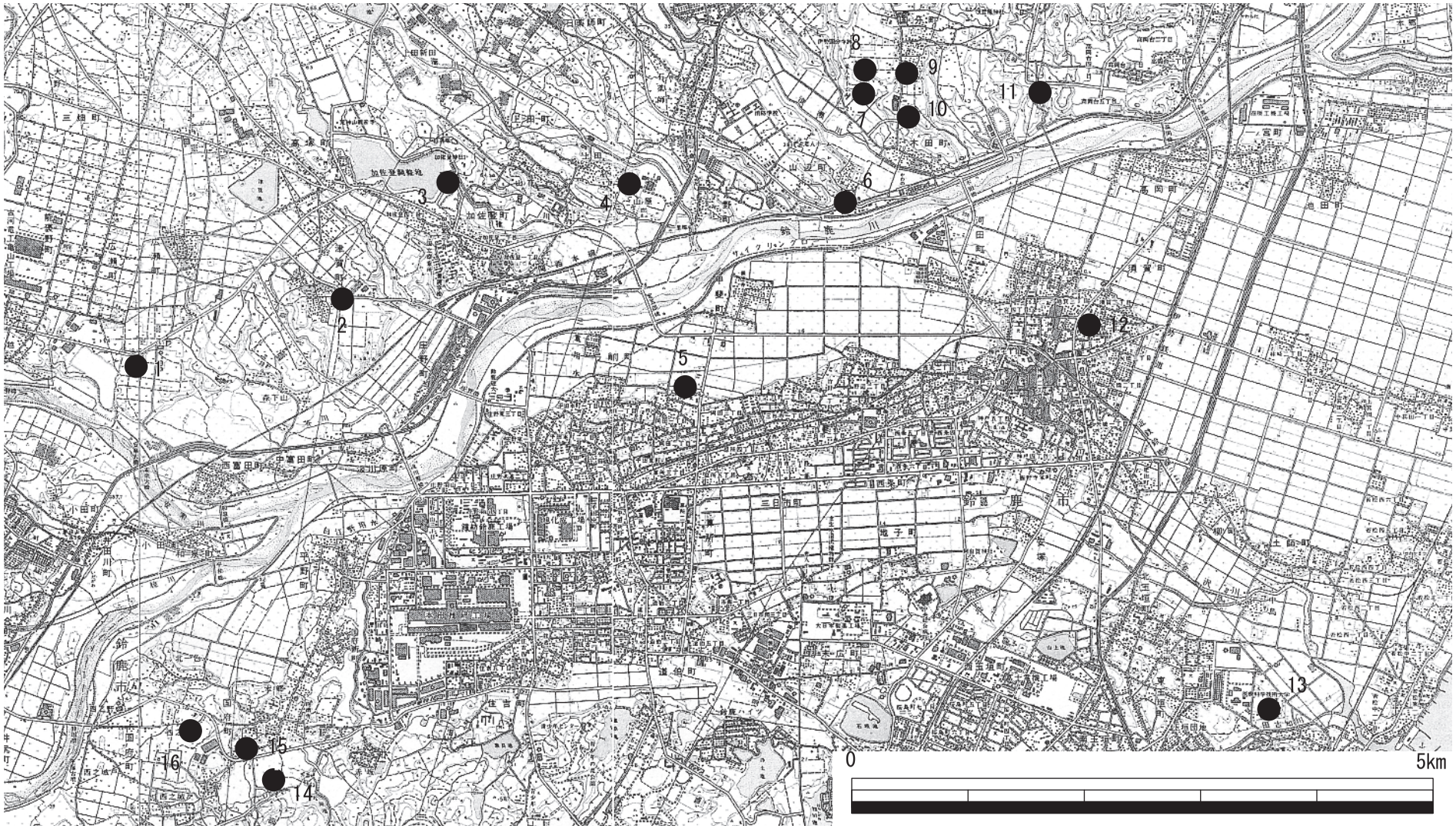
8 月 4 日　本日より，作業員を動員する。犬走りの作出後，壁切り及び全面清掃を行なう。調査区内に 3m 幅のグリッドを設定する。当館，管理企画グループ岡田雅幸副主幹来跡。

8 月 7 日　北側調査区の表土剥ぎ完了後，中央東西調査区の表土剥ぎを行なう。本日にて重機による表土剥ぎを一時終了し，重機を搬送する。また，グリッド設定もほぼ完了する。遺構精査開始。台風接近のため，トイレやテント，シート等の対策を行なう。

8 月 8 日　台風接近のため，終日作業中止。

8 月 9 日　南側調査区で溝 1 条，ピット 5 基を検出する。西側調査区では溝 1 条，大型土坑 1 基を検出。東西溝（ＳＤ 267）は 19 次調査の SD262 及び 20 次調査の SD264 に対応すると考えられる。大型土坑（ＳＸ 268）付近には上面に造成土が残っており，十分に遺構検出できていないことを確認する。鈴鹿市教育研究会社会科班 6 名見学。

8 月 10 日　東側及び中央東西調査区を清掃後，遺構検出を行なう。東側調査区では溝 4 条（ＳＤ 275 ～ 278），性格不明の大型遺構 1 基（ＳＸ 274）を検出する。ＳＤ 277 はＳＤ 267 の延長と考えられる位置で検出し，同一遺構になる可能性が高いと判断する。この他にも，「金藪」に向かって南東から北西に向かってのびるＳＤ 275 とＳＤ 276 を併行して 2 条検出し，道路



1. 長者屋敷遺跡（伊勢国府跡）　2. 津賀平遺跡　3. 川原井瓦窯跡　4. 山の原遺跡　5. 岡田遺跡　6. 山辺瓦窯跡　7. 狐塚遺跡（河曲郡衙跡）　8. 伊勢国分寺跡（推定僧寺跡）　9. 国分遺跡（推定尼寺跡）　10. 木田坂上遺跡　11. 寺山遺跡　12. 須賀遺跡　13. 天王遺跡　14. 天王山西遺跡　15. 三宅神社遺跡　16. 国府Ａ遺跡

Fig. 1　周辺の遺跡（1：50,000）

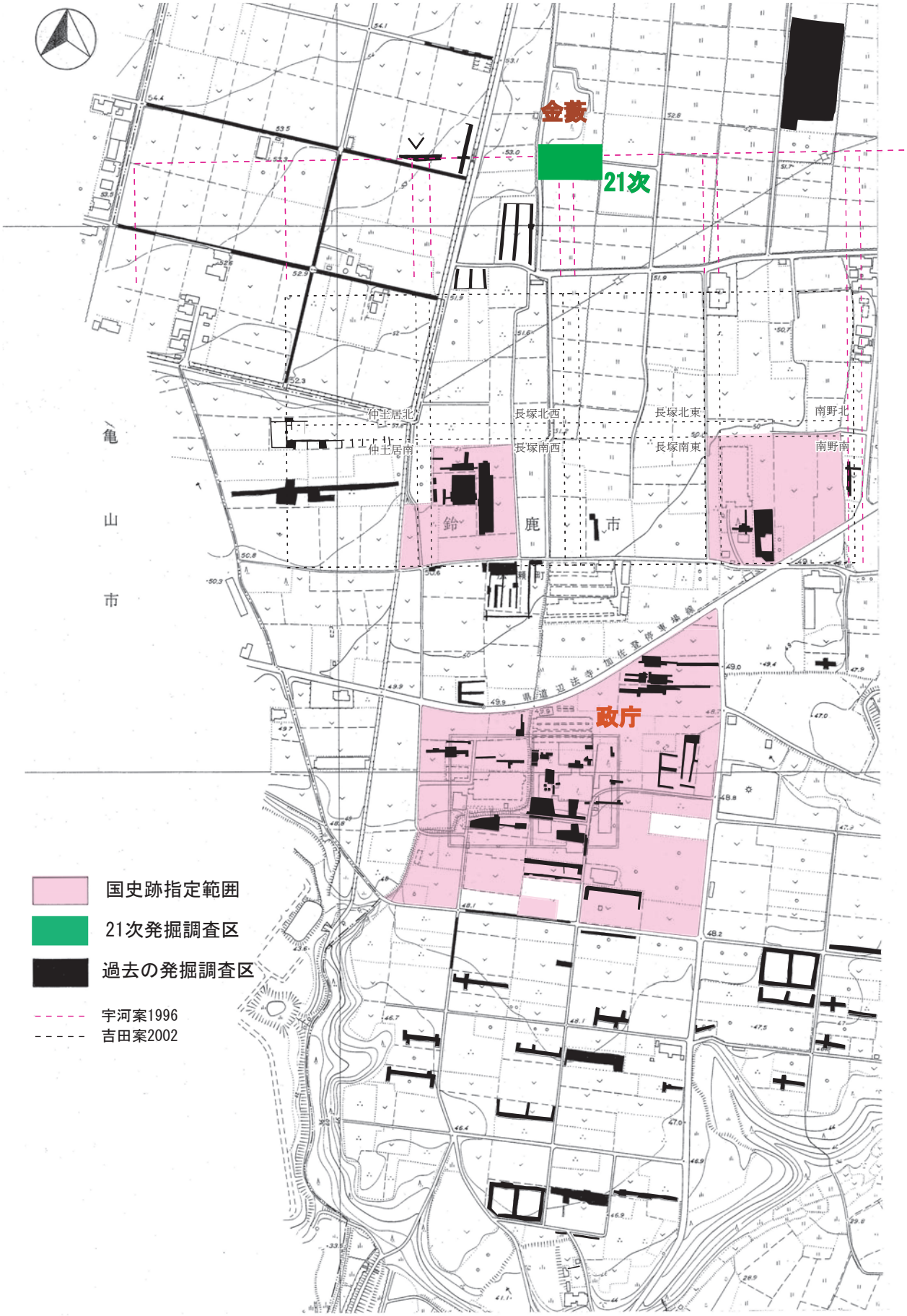

金蔵
21次
政庁
仲主居北
仲主居南
長塚北西
長塚南西
長塚北東
長塚南東
南野北
南野南
鈴
鹿
市
亀
山
市
国史跡指定範囲
21次発掘調査区
過去の発掘調査区
宇河案1996
吉田案2002

Fig. 2　調査区位置図

側溝の可能性を考える。
8月11日～8月20日　盆休みのため，作業中止。
8月21日　ＳＤ267の西壁沿いと北側の半分を掘削する。断面形状が概ね逆台形で，これまでの方格区画溝と同様の埋土，形状を呈す。ＳＸ268のサブトレンチを掘削する。東から西へ傾斜し，検出面から60cmほど掘り込んでいることを確認する。東側調査区の東壁沿いに，ＳＤ275・ＳＤ277・ＳＤ278をまたぐサブトレンチを設ける。その後，ＳＤ275及びＳＤ277の土層堆積を確認するため東壁から7m西にサブトレンチを掘削する。
8月22日　北側調査区で検出しているＳＤ277の範囲確認のため，南北のサブトレンチを9m間隔で西に3箇所設定する。西へ進むにつれて埋土が浅くなり，北側調査区の中央付近ではほとんどが削平されていることを確認する。
8月23日　ＳＤ277の再検出を行なう。調査区の東壁から20m付近までは古代の瓦が多く出土し，その南側にも別の遺構らしきもの（ＳＸ281）を検出する。午前中のみ作業を行なう。
8月25日　北側調査区の遺構平面図を作成する。作業員は終日休みとする。
8月28日　雨天のため，終日作業中止。
8月29日　ＳＸ268の再精査及び北側調査区の全面清掃を行なう。写真撮影後，ライン引きを行なうも降雨のため途中で作業を中止する。
8月30日　ＳＸ268の北西及び中央東側を市松状に掘削する。3層目と4層目の層離面から比較的残りの良い瓦が出土する。
8月31日　ＳＸ268掘削後，写真撮影。ライン引きを継続し，全景の写真撮影を行なう。ＳＤ276の東壁沿いにサブトレンチを掘削する。併せてＳＸ281の南壁沿い及びＳＸ282の北壁沿いにもサブトレンチを掘削する。ＳＸ281は調査区の南側へ延長することが確認されたため，急遽人力掘削により南側に拡張区を設ける。
9月1日　雨天のため，終日作業中止。
9月4日　遺構平面及び土層断面図等の図化作業。
9月5日　図化作業継続。
9月6日　天候不順のため，終日作業中止。
9月7日　天候不順のため，終日作業中止。
9月8日　全体のレベリング作業を行なう。
9月11日～　室内で図面及び遺物の整理作業を行う。作業途中で南北溝の再検討が必要であることが判明する。
9月14日　トイレの汲み取り作業を行なう。
9月26日　トイレ及びテント撤去。ＳＤ277の西端で南へ折り返す南北溝（ＳＤ284）を確認する。
10月2日　再精査の結果，南側調査区においてもＳＤ284の延長である南北溝（ＳＤ285）を検出する。追加の図化作業を行なう。
10月6日　三重県教育委員会文化財保護室鈴木克彦氏来跡。指導委員会等に向けての事前打合せを行なう。南北溝の可能性のある範囲は，指導委員会までに拡張し，当日に検討できるように準備を進めることとする。
10月12日　重機を再度搬入し，追加の表土剥ぎを開始する。ＳＸ281の南側を南北に拡張し，中央南北調査区とする。ＳＸ281は途中まで溝が延長することを確認し，ＳＸ281からＳＤ281へ遺構番号を変更する。
10月13日　追加の表土剥ぎを継続し，西側調査区も東へ拡張する。重機を搬送する。ＳＤ277の西端から南へ折り返す溝（ＳＤ284）を改めて検出する。
10月17日　西側調査区の遺構再検出を行なう。ＳＤ284の西側にほぼ平行するＳＤ286を確認する。午前中の作業のみで終了する。
10月18日　中央南北調査区の遺構再検出を行なう。西側拡張区の平面図加筆。
10月19日　中央南北調査区の遺構検出継続。検出完了後，写真撮影及びライン引きをおこなう。ＳＤ280，ＳＤ281，ＳＤ284，ＳＤ286等に所々サブトレンチを掘削する。
10月20日　午後より，中央南北調査区の遺構平面図加筆。
10月23日～　指導委員会資料作成。
10月27日　再度犬走りの清掃後，西側調査区より全面清掃を開始する。各サブトレンチの土層断面図作成。
10月30日　北側調査区及び東側調査区，南側調査区の全面清掃を終了する。本日より，ブルーシートと土嚢袋の撤去を開始する。
10月31日　残りの中央調査区の全面清掃を行なう。終了後，追加分のライン引きを行なう。
11月1日　調査指導委員会を実施する。
11月2日　調査指導委員会での内容を基に，ラインの引き直し作業を行い，その後航空写真を撮影する。あわせて，「金藪」内の踏査を行なう。午後より，拡張区のレベリングを行なう。

Tab. 1　長者屋敷遺跡調査履歴

次数	調査年度	調査区記号	所　在　地	調査期間	面積	調査原因	概要
プレ1次	1957	A地点	広瀬町字南野			学術	礎石建物
		B地点	広瀬町字矢下				基壇
1次	1992	長塚1	広瀬町字長塚 1247,1248	921110～930129	110	学術	礫敷き遺構
		南野1	広瀬町字南野 971		115		礎石建物
		荒子1	広瀬町字荒子 981		110		瓦溜・溝
2次	1993	6AHI-F, 6AJA-A ほか	広瀬町字仲起 1226・字下 1134 ほか	931129～940228	238	学術	政庁後殿・東隅楼・軒廊・東内溝・東外溝・西外溝
3次	1994	6AJA-J ほか	広瀬町字矢下 1131～1133	941006～941227	750	学術	政庁正殿・西脇殿・西軒廊・西内溝・西外溝
3-2次	1994	県調査区	広瀬町字仲土居, 亀山市能褒野町字中土居	940601～940817	2700	県緊急	溝
4次	1995	6AJA-A ほか	広瀬町字矢下・荒子・仲起	950920～951219	254	学術	正庁後殿・北外溝・西内溝西隅楼
4-2次	1995	県調査区	広瀬町字仲土居, 亀山市能褒野町字仲土居	950605～950713	1600	県緊急	溝
5次	1996		広瀬町字丸内	960620～960716	133	市緊急	竪穴住居・溝
6次	1996		広瀬町字矢下	960625～960719	288	市緊急	溝
7次	1996	6AGE-A	広瀬町字南野 972,972-1,972-2,973	961007～970121	580	学術	掘立柱建物・礎石建物・溝
8次	1997	6AFB-A	広瀬町字長塚 1279-2	971016～980210	632	学術	倒壊瓦・礎石建物・溝
9次	1997	A地区	広瀬町字矢下	980223～980320	21	市緊急	政庁南辺部
		B地区	広瀬町字矢下		26		政庁西脇殿
		C地区	広瀬町字仲起		5		溝
10次	1998	6AFB-B	広瀬町字長塚 1279-3,1279-5	980901～981228	1014.2	学術	礎石建物・溝・土坑
11次	1999	6AJA- ほか	広瀬町字矢下 1176 ほか	990901～000131	863	学術	溝・礎石建物・南門
12次	2000	6AHI-CF ほか	広瀬町字中起・荒子	001001～010311	1,142.8	学術	掘立柱建物・竪穴住居・溝
13次	2001	6AHD-AB ほか	広瀬町字中起 1237,1240-1～3,1241	010920～020214	714.2	学術	溝・土坑
14次	2001	6AEB-AB	広瀬町字中土居 1282-1	020106～020111	246	市緊急	礎石建物・溝
15次	2002	6AJJ-D ほか	広瀬町字矢下 1154 ほか	020424～020812	1,184.1	学術	溝・土坑・古墳・土壙墓
16次	2002	6AJF-B ほか	広瀬町字矢下・西冨田町字東起・矢卸	020620～020925	3,463.4	市緊急	溝・掘立柱建物・土器棺墓・古墳周溝・方形周溝墓
17次	2002	6ADB- A～E	広瀬町字西野 3300	030806～031130	4640	市緊急	掘立柱建物・溝・竪穴住居
18-1次	2003	6AJC-F	広瀬町字矢下 1126	030417～030630	243	学術	溝
		6AJD-E	広瀬町字矢下 1144	030421～030630	267		
		6ALE-A	西富田町字矢卸 1015-17	030528～030630	21		なし
		6ALE-B	西富田町字矢卸 1015-17	030528～030630	11		なし
		6ALC-G	西富田町字矢卸 1015-15・16	030528～030630	48		なし
18-2次	2003	6AEA-A	広瀬町字中土居 1283-2	030902～031126	360	学術	溝・土坑
19次	2004	6AAD-A	広瀬町字丸内 2609-1	040831～041118	220	学術	溝
		6AFA-A	広瀬町字中土居 1290-1	040913～041118	200		なし
		6ABB-A	広瀬町字長塚 1275	040928～041118	550		竪穴住居
20次	2005	6AAD-B	広瀬町字丸内 2606-1,2607-1,2608-1	050822～051130	200	学術	溝
		6AGF-A	広瀬町字西野 945-6	050822～051130	140		溝
21次	2006	6ACB-A	広瀬町字西野 3242	060719～060908	500	学術	溝・土坑

11月8日　訂正した箇所の平面図の補正等の追加調査を行なう。
11月20日　遺構保護用の山砂を搬入し，各遺構の保護を行なう。
11月21日　重機を搬入し,埋め戻し作業を開始する。
11月22日　埋め戻し作業を継続する。
11月23日　埋め戻し作業を半日継続し完了する。本日にて，現地作業を全て終了する。

Ⅲ．調査の方法

今回の調査区は面的でなく，トレンチを組み合わせた形状であるため，各場所を表現する方法として方位を用い，北側調査区，東側調査区等と呼称することとした。また，中央の飛び地の調査区を中央調査区としていたが，途中で拡張したため中央の東西方向の調査区を中央東西調査区，同南北方向の調査区を中央南北調査区とした。さらに，北側調査区から金藪へと伸びる調査区を北側トレンチと呼称して調査を実施した（Fig.3）。

調査区には国土座標第Ⅵ系に基づく３ｍ間隔のグリッドを設け，遺構平面図等の計測はこれを基準とした。高さについては東京湾標準潮位をもとに計測したが，本書中には「ＴＰ+」表記は省略し，数値のみを表記した。単位はｍである。

また，遺構番号はこれまでの長者屋敷遺跡における発掘調査の原則に則って，昨年度からの連番の267番からとした。さらに，個別の遺構番号の前には，遺構の性格を意味する記号と組み合わせて表記することとした。

Ⅳ．基本層序

これまでの調査成果から，長者屋敷遺跡の基本層序は下記のとおりであるが，後世の耕作等によりⅡ～Ⅳ層が削平されている場所が多く存在し，第21次調査地も同様であった。

Ⅰ層：黒褐色土層（耕作土・表土）。
Ⅱ層：黒褐色シルト層（黒ボク層）。
Ⅲ層：黒褐色土層と黄褐色土層の混在層（漸移層）。
Ⅳ層：褐色砂質シルト層。
Ⅴ層：黄褐色砂質シルト層（地山）。
Ⅵ層：黄褐色砂礫混じりシルト層。

今回の調査区ではⅢ層は南東隅で僅かに残存しているのみで，大部分では確認することができず，約20cm堆積しているⅠ層直下でⅤ層が確認された。また，Ⅴ層上面には重機のキャタピラやバケットの痕跡が散見された。これは，おそらく以前に行なわれた耕地整理の際に残されたものだと推定され，概ね52.1ｍ前後まで削平を受けていることになる。調査区の南東隅ではⅣ層の下層にⅤ層が確認されており，旧地形は緩やかであるが南東方向に傾斜していると考えられる。

遺構の検出はⅤ層上面で行なった。なお，長者屋敷遺跡における本来の遺構面はⅣ層上面であるため，一部に残存するⅣ層上面でも遺構精査を行なったが，遺構は検出されなかった。そのため，中央東西調査区ではⅤ層まで掘り下げて再度遺構精査をしたが，南側調査区及び西側調査区で確認したⅣ層は掘削せずに残してある。Ⅴ層の上面には，所々で黒褐色と地山が混じったような層序が確認されたが，この混在層を撤去すると純粋なⅤ層が確認され，その面で遺構の掘方が検出されている。

Ⅴ．検出遺構

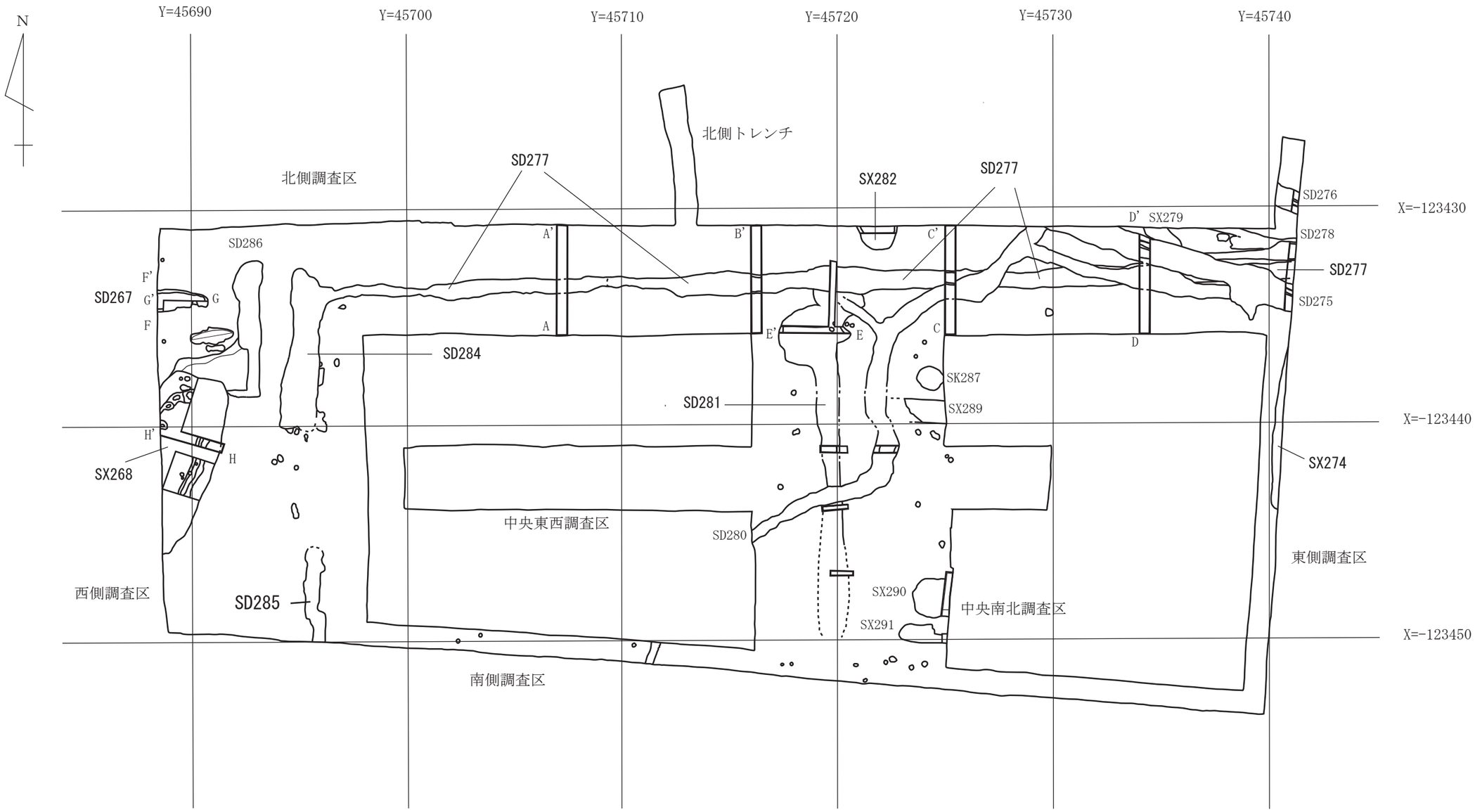
今回の調査では，溝や性格不明の大型土坑，土坑，ピット等を検出した（Fig.3・４）。以下では，伊勢国府跡に関連すると考えられる古代の遺構を中心に報告する。

（１）溝

ＳＤ267　西側調査区の北側で検出した東西溝である。検出面において幅１ｍ，深さ25cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。調査区の西方へ続いており，第20次調査６ＡＡＤ－Ｂ区で確認されているＳＤ264及び第19次調査６ＡＡＤ－Ａ区のＳＤ262と同一溝になると考えられる。

埋土は２層確認でき，上層から黒色シルト層，黒色シルト層に黄褐色土層が混じる層序となる。なお，この堆積層序はＳＤ262やＳＤ264と同様である。西壁沿いのサブトレンチと北側を半分のみ掘削したが，瓦２点が出土したのみであった。

ＳＤ277　北側調査区で検出した東西溝である。検出面での幅は１ｍ前後であるが，深さ約10cm程度の残存であり，僅かに溝の基底部を検出したに過ぎない。ＳＤ281との交点よりも西側がやや浅くなっているようである。同様に，埋土も異なっており，西側で黒褐色土層と黄褐色土層の混在層が１層のみ確認され，東側では上層に西側と同様の埋土があるが，その下層に混じり気のない均質な黒色シルト層が堆積する。途切れているが，削平が激しいことを



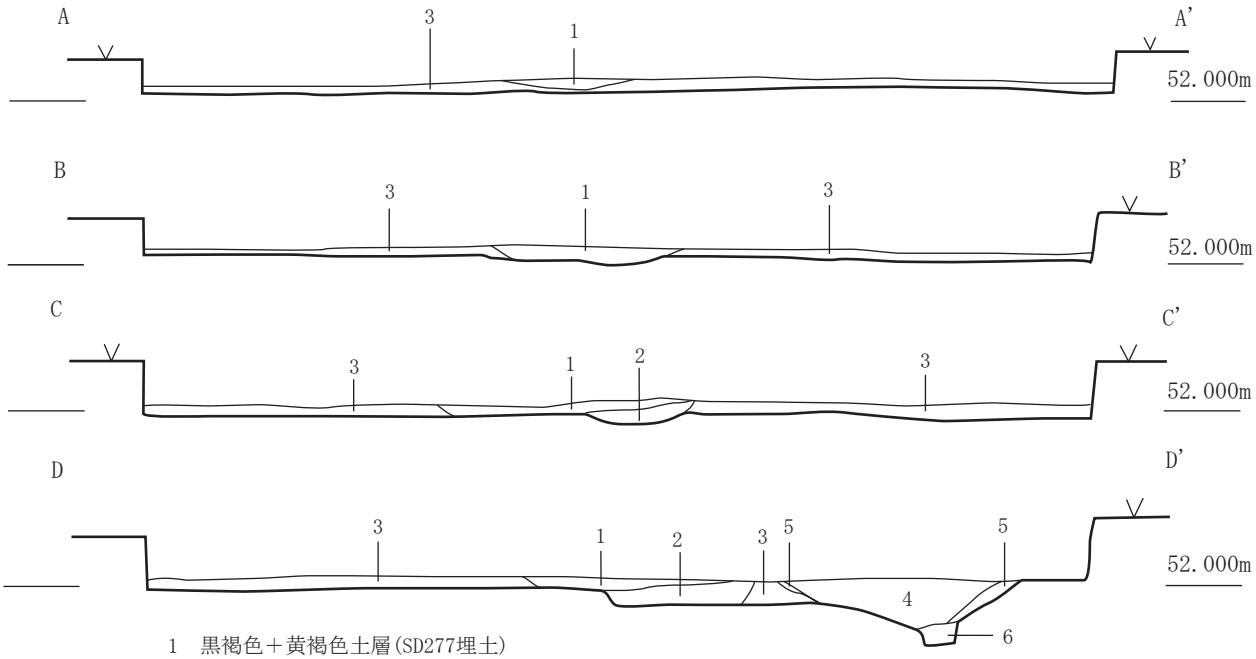
※ゴシック体で表記した遺構は，古代のものと考えられる。
　明朝体で表記した遺構は時期を限定し得なかった。

10m

縮尺　1：200

Fig.3　遺構平面図

SD277



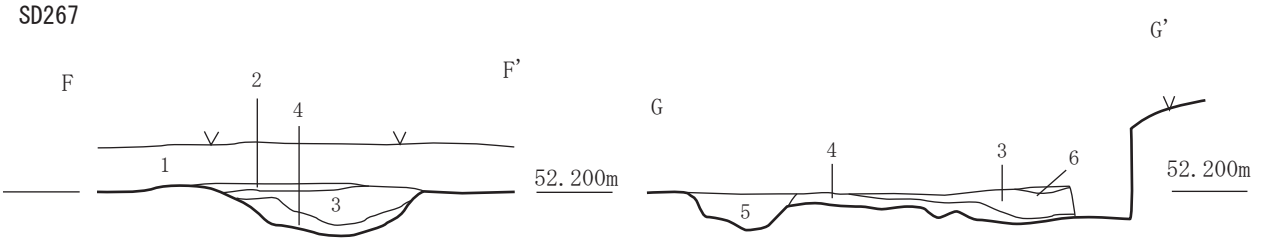
1　黒褐色＋黄褐色土層(SD277埋土)
2　黒色シルト層（SD277埋土）　10YR1.7/1
3　地山＋黒褐色土層（漸移層）
4　黒褐色砂礫層（SD275埋土）　7.5YR1.7/1
5　褐灰色シルト層（SD275埋土）　7.5YR5/1
6　黒褐色シルト層（SD275埋土）　7.5YR1.7/1

0　1m
縮尺　1：40

SD281

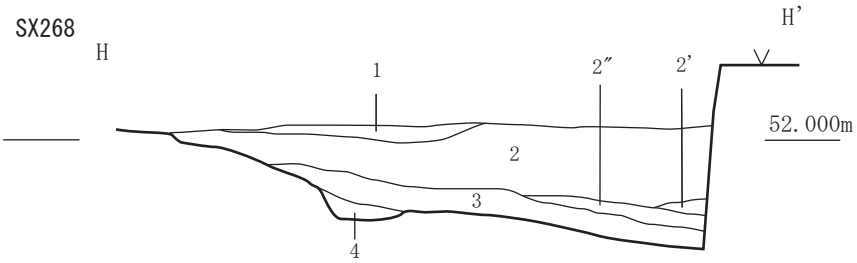
1　黒色シルト層（SD281埋土）　7.5YR2/1

SD267



1　黒褐色砂礫混シルト層（耕作土）　2.5Y3/1
2　黒色シルト層（黄褐色ブロック混）　7.5YR1.7/1
3　黒色シルト層（SD267埋土）　7.5YR1.7/1
4　黒色シルト層+黄褐色土層（SD267埋土）
5　黒褐色シルト層（黄褐色ブロック混）（SK283埋土）
6　黒褐色+黄褐色ブロック混層（造成土）

SX268



SX268埋土

1　黒褐色土層+黄褐色土層
2　黒色シルト層　10YR1.7/1
2'　褐色シルト層　10YR2/3
2″　黒色シルト層　10YR1.7/1
3　暗褐色砂礫混シルト層　10YR1.7/1
4　黒褐色砂礫混シルト層(黄褐色土層混)
　10YR3/1

Fig. 4　土層断面図

考慮すると，本来はＳＤ 267 と同一の遺構であった可能性が高い。

ＳＤ 281 よりも東側のみで瓦が出土したが，特にＳＤ 281 との交点付近で顕著であった。

ＳＤ 281　中央南北調査区で検出した，南北方向の溝である。検出面での幅は 1 m前後である。数箇所にサブトレンチを設けたが，深さは検出面から 10cm 程度しか残存していなかった。埋土は黒褐色シルト層とそれに礫が多く含む層の 2 層から構成される。

ＳＤ 277 との交点で膨らんでおり，そこから比較的大型の瓦がまとまって出土した。

ＳＤ 284・285　西側調査区で検出した南北溝である。検出面での幅は最大で 1.6 mあるが，深さは 10cm 程度しか残存していなかった。途中で途切れているが，この 2 条の溝は本来同一の遺構であったものと推定される。埋土は黒褐色シルト層に黄褐色土層が混じる層の単層である。所々サブトレンチを掘削したが，遺物は 1 点も出土しなかった。

（2）土坑

ＳＸ 268　西側調査区の中央で検出した性格不明の大型土坑である。東西 3.5 ～ 4 m，南北 8.5 m程度であるが，調査区外へと続くため正確な形状は窺えない。深さは最初東端で浅く緩やかに落ち込むが，途中から深く落ち込み，最も深い所で検出面から約 80cm を測る。

埋土は主に 3 層あり，上層から黒色シルト層，暗褐色砂礫混シルト層，黒褐色砂礫混シルト層（黄褐色土層混じり）となる。最下層が遺構の周りで落ち込んでいるため，竪穴住居の周壁溝のように見えるが，床面が平坦でなく傾斜していることや全体の平面形状等から竪穴住居とは考えにくい。遺物は黒色シルト層と暗褐色砂礫混シルト層の層離面から，比較的残りの良い瓦が出土した。

ＳＸ 274　東側調査区の中央付近の壁沿いで僅かに検出した大型遺構であるが，大部分が調査区外にあるため詳細は不明である。遺構埋土の掘削は一切行なっていないが，上面には均質な黒褐色シルト層が確認できる。埋土の質感はＳＸ 268 に酷似する。竪穴住居の可能性も考えられるが，形状や軸方向がＳＸ 268 とほぼ同一であることから，似たような性格の遺構かもしれない。

ＳＸ 282　北側調査区の中央付近で検出した。北側が調査区外へ続くため，円形の土坑となるのか溝となるのか判断できない。埋土は黒褐色砂礫混シルト層の単層が 10cm 程度残存していた。比較的多くの瓦が出土している。

Ⅵ．出土遺物

全体としては整理箱に 3 箱の遺物が出土した。その大部分はＳＤ 277 及びＳＤ 281，ＳＸ 268 から出土した瓦である。瓦以外では，土師器 2 個体分と須恵器 1 点，山茶碗 1 点が出土したのみである（Fig. 5・6）。

土師器盤（1）　口縁部において約 6 分の 1 の残存であるが，口径は 24.2cm に復元される。全体に摩滅しているため，調整の痕跡は不明瞭である。淡赤褐色を呈し，直径 1mm 程度の砂粒を少量含む。ＳＤ 281 出土。この他に土師器甕の頚部が 1 個体分出土しているが，小片のため図化できなかった。

打製石斧（2）　刃部と基部の両端を欠損するが，残存する長さは 11.3cm，幅 6.5cm，厚さ 2.5cm，重量 178.9 g を測る。薄く剥離する特徴のある片岩系の石材を用いて製作されている。

平瓦（3 ～ 9）　いずれも平瓦の破片である。遺構からの出土したものの内，比較的残りのよいものを図化した。その多くは凸面に縄目，凹面に布目が認められる。3・5・7・8 などのように，長辺側を 2 箇所ほど面取りしているものが多い。

丸瓦（10 ～ 12）　いずれも丸瓦の破片である。玉縁部分が残存しているものを図化した。凹面には布目が観察される。なお，10 には玉縁と考えられる部分に数条の条線が認められる。

以上のように出土遺物の多くは古代の瓦である。瓦当部の残るものがないため，詳細な時期などは特定できないが，概ね古代の瓦と考えられる。なお，土師器や須恵器を含め，他の時代のものはＳＸ 268 の山茶碗 1 点のみであることから，ＳＤ 277 やＳＤ 281，ＳＸ 268 等は奈良時代から平安時代初頭の遺構だと考えられる。

Ⅶ．まとめ

これまでの調査成果から，今回の調査地は東西溝と南北溝が交差する地点と推定されてきた。そして，今回の調査でも予想された位置からＳＤ 267 及びＳＤ 277 の東西溝が検出された。また，やや予想とは異なる位置であったが，ＳＤ 281 及びＳＤ 284・ＳＤ 285 等の南北溝も平行して検出された。いずれの遺構も深さ 10cm 程度と基底部が僅かに確認されたに過ぎないが，今回の遺構検出面が概ね 52.1 m前後であ

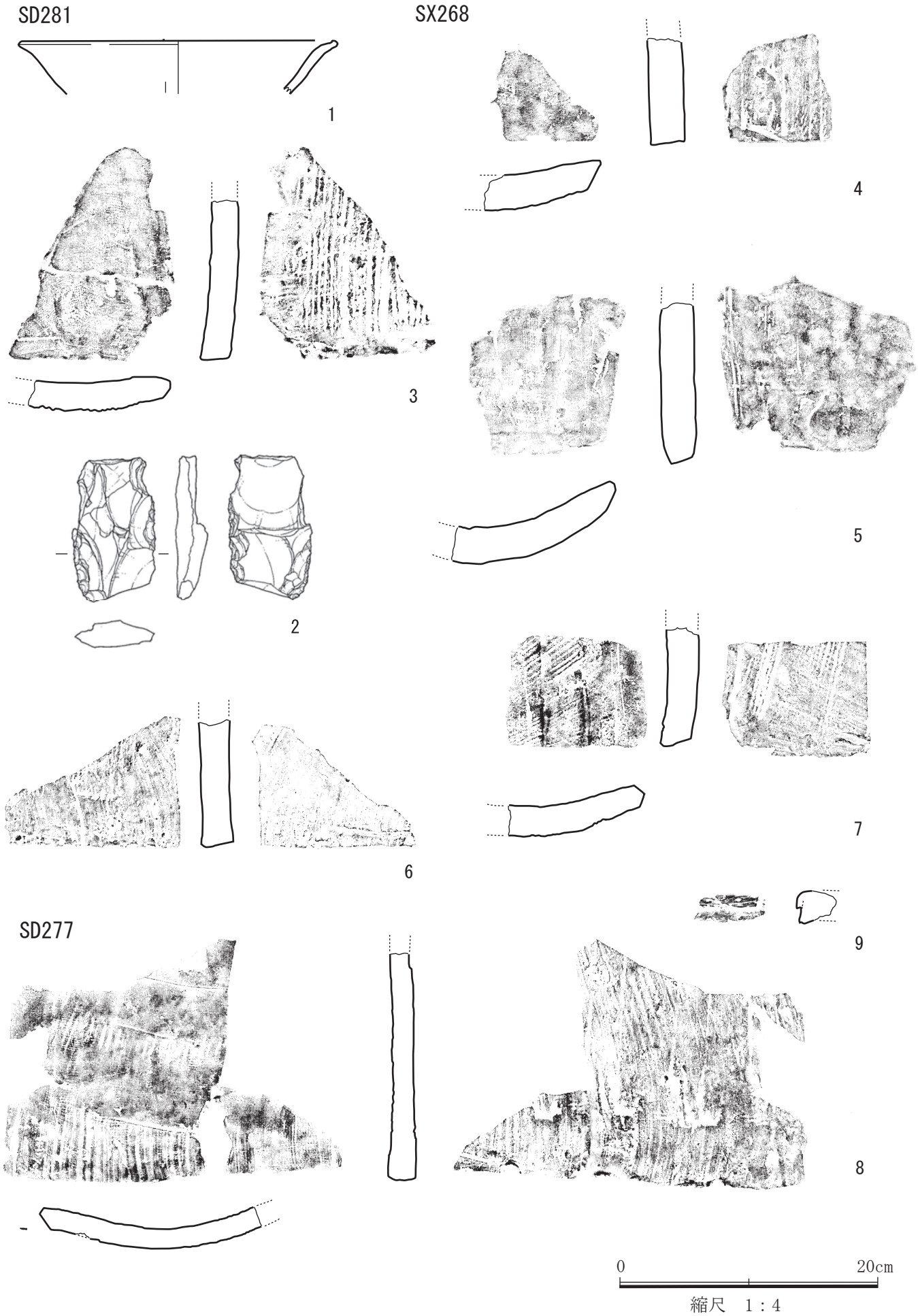


Fig. 5　出土遺物（1）

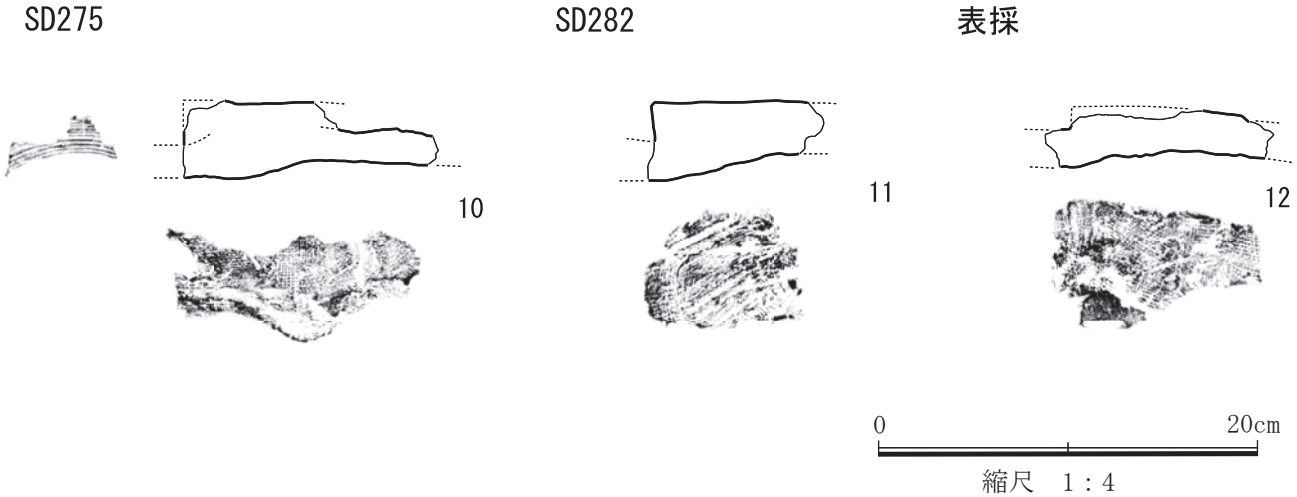


Fig. 6　出土遺物（2）

り，周辺の調査区での遺構検出面が 52.8 mであることと比べると約 70cm 低くなっており，当地が大きく削平を受けているためだといえる。

また，これまでに南北溝の軸線上で発掘調査が行われていなかったため，当地においても他の検出例から 12 m幅の道路が復元されてきた。しかし，今回検出されたＳＤ 281 とＳＤ 284 の両南北区画溝は芯々間で 24 mを測り，これまで推定されてきた道路の２倍の規模の道路であることが新たに判明した。この大路は政庁から真北に延びていたことから，伊勢国府の中心軸として構成されていた可能性が指摘される。また，その延長には，通称「金藪」と呼ばれている森が存在し，ここに何らかの施設があった可能性もあり，これまでの復元案とは異なる地割が存在した可能性が考えられるようになってきた。

そこで，鈴鹿市考古博物館では，平成 17 年度からこれまでの成果を含めた調査区を国土座標上に反映する作業を開始している。それに今回の調査成果を加えたものが Fig. 7 である。ここで，新たな復元案を提示することはできないが，今後これまでの調査の記録を継続的に座標上に配置していき座標値で検討を行い，土地利用の計画性や基準となった尺等を明らかにしていきたいと考えている。

さらに，今回の調査では，ここ数年行ってきた北方官衙北限の調査と比べると多くの遺物が出土したといえる。その大部分は瓦であるが，これらはＳＤ 277 とＳＤ 281 の交点付近で多く出土した。これまで，北方官衙を区画するといわれてきた溝からはほとんど遺物が出土しなかったため，本当に国府に伴う区画溝であるのかについて慎重な意見もあったが，今回の調査によって少なくともこの溝の年代観が古代に帰属するものであることが確認された。このことから，他の調査区で区画溝と報告されている遺構も該期のものである可能性が高く，この地域に古代において計画的な地区割りがあったと考えることができるようになった点は大きな成果であった。通常国府周辺では遺構が南へ広がっていることが多いが，伊勢国府は北へ広がっており，特徴的な構造となっている。このように伊勢国府跡は全体構造の分かる貴重な遺跡であり，今後も継続した調査が必要とされる。

参考文献

宇河雅之 1996「長者屋敷遺跡」『長者屋敷遺跡・峯城跡・中冨田西浦遺跡』三重県埋蔵文化財センター
宇河雅之　1997「伊勢国府の方格地割―その存在の可能性と意義―」『研究紀要』第６号　三重県埋蔵文化財センター
小倉　整 2006『伊勢国府跡８』鈴鹿市考古博物館
杉立正徳 1997「長者屋敷遺跡（第５次）発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ　平成８年度』鈴鹿市教育委員会
新田　剛　1994『伊勢国分寺・国府跡』鈴鹿市教育委員会
新田　剛 2001『伊勢国府跡３』鈴鹿市教育委員会
新田　剛 2004『速報展　発掘された鈴鹿 2003』鈴鹿市考古博物館
水橋公恵 2004『伊勢国府跡６』鈴鹿市教育委員会
水橋公恵 2005『伊勢国府跡７』鈴鹿市考古博物館
吉田真由美 2002『伊勢国府跡４』鈴鹿市教育委員会
吉田真由美 2003『伊勢国府跡５』鈴鹿市教育委員会
吉田真由美 2004『鈴鹿市考古博物館年報第５号』鈴鹿市考古博物館

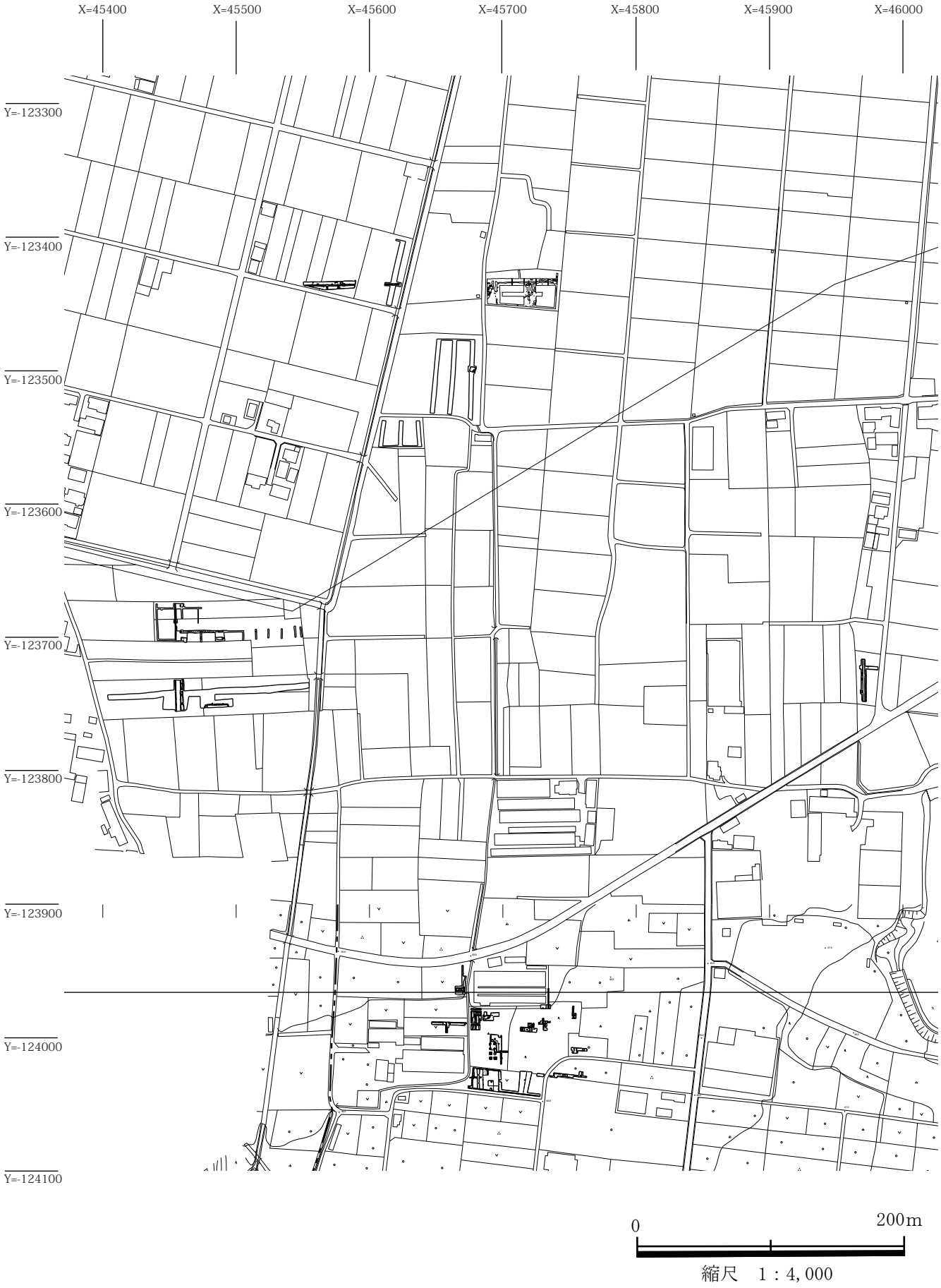


Fig. 7　過去の調査区配置図

写真１
調査区航空写真

写真２　調査前風景（南西から）

写真３　北側調査区遺構検出状況（北東から）

写真４　ＳＤ 267 検出状況（東から）

写真５　ＳＤ 267 土層断面（東から）

写真６　ＳＤ 277 土層断面（東から）

写真７　ＳＤ 277 遺物出土状況（北から）

写真８　ＳＸ 268 検出状況（北東から）

写真９　ＳＸ 268 掘削状況（北東から）

写真 10　ＳＤ 281 遺物出土状況（北東から）

写真 11　ＳＤ 281 土層断面（南から）

写真 12　ＳＸ 274 検出状況（北から）

写真 13　金藪内にある巨石（上から）

写真 14　土師器盤（Fig. 5-1）

写真 15　平瓦（凸面）（Fig. 5-7）

写真 16　打製石斧（Fig. 5-2）

写真 17　　平瓦（凸面）（Fig. 5-3）

写真 18　平瓦（凹面）（Fig. 5-8）

写真 19　丸瓦（凹面）（Fig. 6-11）

写真 20　丸瓦（玉縁部）（Fig. 6-10）

写真 21　刻印瓦（Fig. なし）

報　告　書　抄　録

Tab. 2

ふりがな	いせこくふあと きゅう
書　　名	伊勢国府跡　9
編著者名	田部　剛士
編集機関	鈴鹿市　文化振興部　考古博物館
所 在 地	〒513-0013　三重県鈴鹿市国分町２２４番地　TEL ０５９（３７４）１９９４
発行年月日	２００７年3月３１日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長者屋敷（ちょうじゃやしき） （伊勢国府跡）	鈴鹿市広瀬町（すずかしひろせちょう）	24207	363	34° 53′ 12″	136° 30′ 00″	2006 年 7 月 19 日 ～ 2006 年 11 月 23 日	500 ㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長者屋敷 21 次 (6ACB - A 区)	官衙	奈良・平安	溝・土坑	瓦・土師器	方格地割の範囲確認調査

伊　勢　国　府　跡　９

発　行　日　　２００７年3月３１日
編集・発行　　鈴鹿市
鈴鹿市考古博物館
〒５１３－００１３
三重県鈴鹿市国分町２２４番地
TEL ０５９（３７４）１９９４
FAX ０５９（３７４）０９８６
E-mail：kokohakubutsukan @ city.suzuka.lg.jp
URL：http：//www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/
印　　刷　　早川印刷株式会社

Ise Kokuhu Site

Preliminary Report No. 9

March, 2007

Suzuka Municipal Museum of Archaeology